

寒
椿

寒椿

宮尾登美子

寒椿

昭和五十二年四月十五月初版發行
昭和五十二年十二月二十五版發行

著者 宮尾登美子

發行者 高梨 茂

印刷 三陽社
製本 小泉製本

發行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目
電話 五六一一五九二一
振替 東京二三四
検印 廃止

目次

一章	小奴の澄子
二章	久千代の民江
三章	花勇の貞子
四章	染弥の妙子

240	198	102	5
-----	-----	-----	---

寒 椿

一章 小奴の澄子

高知の町がまだ戦火で焼けなかった昔、浦戸町の芸妓こ子方屋かたやの松崎には入口の表格子から玄関まで五間ばかりのあいだ、飛石わきの芝のなかに、互い違いに椿の木が六本植えられてあった。椿は肉厚の白や斑の八重や素っ気ない一重の藪椿などそれぞれ種類が違っていて、寒の入りから春先まで長い期間替り合っては咲き、ひと頃、松崎に住込んでいた澄子以下三人の仕込みっ子とこの家の娘悦子との、楽しい遊び道具のひとつになっていた事もある。

ふつう玄人衆の習慣では、花模様の衣裳を「素人柄」などと云って着ないものとしており、とくに椿は着物ばかりでなく一輪差しに挿すさえ不吉花として忌むのに、松崎の家に格別その斟酌がないのは、子方屋はここのお父さんの道楽、本職は芸娼妓の紹介で、それにお母さんも素人出と云う変った家風のせいなのであろう。椿はぼたりと首から挽もげると云われるが必ずしも全部がそうではなく、木のままに茶色の錆が来たのを千切っても松崎のお母さんは別に咎めはしなかつ

たから、五人の子の皆が首輪を作りたいときは地に落ちてゐる分では足りず、木に首を突っ込んで、

「花、ないかないか」

「椿、ないかないか」

と勝手な節をつけて唄い乍ら、革のようにきつぱりと堅い葉のあいだを掻き分けて捜した情景は、いまの澄子の瞼の裏に、墨で隈取りした塗り絵のように幼な顔のままで泛び上つて来る。隣は浄土宗の寺で、高い屋根が日を遮ぎる午後になると日おもてと日かげの木とでは花の色がかつきりと違つて見え、それも葉裏にうつむいて咲く赤い花と来たらまるで血のように濃く生々しかったのを、その遠い記憶が何故こんなに鮮やかに頭に刻み込まれていたのか、あの大怪我の日からずっとこうして寝た儘の姿になつてゐる澄子は、それをなつかしみ乍らも不思議な事としてときどき思い返す。

怪我をしたのは今年の元日、三、四人でお爛始かんしに招ばれていた小唄仲間の芳子の家の二階で、そう飲んでもいなかったのに、ふと便所に立とうとしたとき、背骨を下からぐいと引っ張られる感じがあつてぐらりとよろめき、はっと支えた手の下とたたたらを踏んだ後足の裏は全くの空で、澄子の躰は忽ち家中を揺がせ乍ら大きな音響とともに狭い階段を転がり落ちた。上で見ていた芳子は、

「姐さんちょうど身投げでもするときのように、自分から階段へ躰をぶちつけて行つたみたいでしたよ」

と云い、澄子の正月着の裾が半開きのままいく度か弾み上って落ちてゆくを見て、てっきり、「姐さんもうあかん。躰が毀れた、骨が砕けた、」

と思ひ込み、腰が抜けて暫くはその場を動けなかつたと云う。

芳子にそう聞くと澄子には確かに思ひ当るふしもあつて、昔からずっと世話になつてゐる溝上の足がこのところ暫く遠のいてゐる不安のために、暮以来夜の寝つきが悪くなつて了い、不本意乍ら睡眠薬を使つてゐるその名残りの頭のなかで、ひょっともう死んで了いたいと云う氣がほんきで動いてゐたかも知れぬ、と思つた。毎度旦那を待つだけの、二号と云われる暮しも一見氣樂そうでもいいけれど、飽かれれば来なくなり、来なくなればそれが切れ目と云うおぼつかなさがあるだけに、相手の思惑以外、行末安泰の保証と云つては何ひとつない。とくに向うが家庭に手も足も取られてゐる正月往来は、間違つてもこちらに現われる試しはないだけに、胸に風穴でも空いたように小寒い氣になり、毎年の事乍ら春の明けるのを待ち兼ねる思ひがする。

ときどき澄子の氣が立つて来ると溝上は、

「お前は聞き分けのええ子や。それだけが取り柄や。無理云うて儂を困らせたりはせん」

と先廻りして釘を差すのを忘れないだけに、拗ねも怒りも出来ないが、長い年月のあいだにはこちらら機嫌のいい顔ばかり作つてもいられず、音沙汰なしで正月休みに入つて了つたこの年などはいらいらが昂じて、

「生きると云うのもめんどくさいもんや」

と投げやりに呟いた事も確かに二、三度はあつた。

それでも芳子の家の階段から落ちたとき、意識を無くしていたのはほんの一分間ともまた何時間ともその感じは澄子には判らなかつたものの、ちょうど瀬戸物の罅割れに似た走りかたで痛みが頭の後から額へと伝わって来て目が明いたとき、その目のすぐ真上に薙刀箒が埃をくつつけたままぶら下っているのが見え、

「あ、目はまだ生きちよる、」

と驚き、それから、

「あ痛っ」

と声を出してみて、

「口も助かつた、」

と思い、廻りに人声も聞え、

「耳もある、」

と安堵の大きな息をした事を思い出す。

ただ、氣のついた途端、軀はもうとうに千切れて無くなっているものと思ひ込んでいて、傍でうろたえている正月の相客たちに、

「うちはもう首から上しか無いのやからねえ。首だけそーっと抱えてお医者へ連れて行て頂戴、」
としきりに繰返していたのを憶えているし、芳子たちはそれを大怪我で惑乱のための謔言と取り、
「頭、冷やそうか」「目、瞑らせて」「えらい逆上^{のぼせ}ちよる。顔が真赧や」などとうわずって云い合っていた声もまだ耳の底に残っている。

あの日、救急車で運ばれて来たこの高知赤十字病院でのさまざまな検査の結果、脊椎の強打によつて首から下は麻痺して了つており、いまのところマッサージと投薬で様子を見る以外当分恢復の見込みと云つては立たないのを、医者は無論本人には聞かさないが、死んで了つた牀を頭だけで支えている澄子自身には誰よりも一番それがよく判る。それでも入院直後は、ともかく首は胴体についていて血は一滴も流れなかったのだから、とじき癒る望みも繋ぎ、回診の医師に明るい顔で、

「先生いつになったら起上れます？ 一週間？ 十日？ はつきり日を教えて頂戴。うち家の中を片付けに帰る都合もありますきに、」

などと問ひ詰めようとしていたのに、そのうち牀はいつかな動こうとせず、倉庫の中にも置き忘れられた荷物のように誰かが手を触れない限り、寝間着に小皺ひとつ出来ないしぶとさでいるのを見て、ときどき大声挙げて狂い廻りたいほどの口惜しさに駆られるときもあった。

首の軸も廻らないのだから自分の手先さえ眺めるのも叶わないが、毎朝看護婦が脈を取りに来てくれるとき目をやってみれば、右手は人差し指だけきゅつと伸ばし、あとの四本は半開きのままに固まつていて、それはちょうど、何かに縋りつこうとするときのような形に見える。若い陽気なマッサージ師はその指を一本一本伸ばして、

「ほうら、これは寒さに悴^{かじ}んでおっただけじゃ。こすつて暖めりゃあすぐ癒る癒る、」と口を叩き乍ら揉みほぐしてくれるものの、マッサージが終ればまたもとのように助けを求める形に曲つて了うのを見て、澄子はやつぱり、一時的にも死にたいと考えたのはあれは本心じやな

かった、と思った。

これまで生きて来た五十三年という長い月日には、たくさんの運命の変化があつたけれど、どんなどん底の暮しに落ちても死にたいとまで自分を追詰めた事のない澄子にしてみれば、この如何にも恵まれた囲われ者の境涯くらいでくたびれた、などと考えるのは贅沢と云うより他なかつたと今更に思い、それももうこんな躰になつて了つては溝上から即時縁切りを申渡されてもいたしかたない事、と云う悲しい弁えはある。もともと氣の早い性質で、それに長い療養と云う氣持をまだしっかりと据えていないうちは、入院後暫くのあいだ気分にとても出入りがあつて、一日はすっかり了簡して自分を宥めていても一日はそれが悉く覆され、あのとき打ち所が悪くていっそ死んでいればよかつた、と胸のうちが猛り狂い、目まで赧く充血するときだつてある。

それと云うのも、死んでいる筈の躰がその実決して死んで了つているのではなく、大きな息をすれば蒲団を載せたまま胸も盛上るし、それに食べれば食べただけ下を汚す仕掛けになつてゐるのが澄子にとってどれだけ辛いのか、一日にいく度か衝立てで寝台を囲い廻し、蒲団を下からたくしあげられるたび、感覚はなくても匂いでその内容が判り、判れば付添婦の顔を見るのが空恐しくていつも先に固く目を閉じて了う。入院直後から泊り込んで貰つてゐる年配の付添婦は、これまでどんな人生を経て来た人やら笑顔のひとつ、優しい言葉の一言知らない人で、朝、この大部屋の寝台脇の床に蓐藁を敷いて寝ていた蒲団からのろのろと起上ると、機嫌のいい日は澄子の首を横に向けて洗面器を支え、口を漱がせてくれたあと、患者食を少しずつ差入れてくれる。齒も舌も生きてゐるのだから味はよく判り、食欲もふつうにあるのを、風向きの悪い日の付添婦とき

たら眉間に深く堅皺を刻んで口もきかず、まるでスコップでゴミでも投捨てるように山盛りのスプーンの手をやけに急がせ、

「ちょっと待って。咽喉へ詰まる、」

とでも止めようものなら今度は長い時間手を休めて窓の外を眺めるばかり、その意地悪さもまだ金を払ってこちらが雇っていると思うだけ、ほんの僅かばかり澄子のほうに救いがある。

躰はこのままでもせめて手だけは欲しい、と澄子はどれだけ思ったか、手さえあれば自分で茶碗を持ち、大好物のらっきょうを載せて白い御飯も好きなだけ掻き込める、と思うのは夢だとしても、下の始末のあと、せめて枕許のパウダーや匂い消しのスプレーくらい取り次いでやれるのに、と手抜きされたときなどは沁々と齒搔ゆい。年寄りだけに労を惜しむ気持も強いのか、澄子の躰の調子で紙おしめをたくさん使う日など、それはそれは邪慳に丸太ン棒でも転がすように音を立てて躰を扱うのを見て、澄子はこれが地獄、と嘆こうとする自分を抑え、まだ口汚なく罵られないだけでしたといつも胸を鎮めようとする。若い頃には人に娼妓、と唾を吐きかけられるような呼ばれかたをした事もあったし、商売女と見縊られ蔑まれたのも忘れるほどたくさんあった事を思えば、付添婦に手荒くされるくらいで泣いてたまるものか、とじつと奥歯を噛み締める思いがあった。

この病院は国鉄高知駅の真裏にあり、田圃のなかの敷地に小刻みに病室を継ぎ足して拡張してあって、一階の澄子の寝台からは前の病棟と渡り廊下が窓越しに見える。首の固定された澄子の視線は右から左へ、左から右へいつも扇の七分開きの形に限られ、その扇のなかには古びた「ス

ト決行」のピラが貼られてある入口の扉や、地図のような染みのある天井、点いていないときには汚れの目立つ螢光灯があり、枕を高くして貰えばそれに同室五人のそれぞれに病み伏す姿も入って来る。

入院以来澄子の目は殆ど一日中、その渡り廊下のほうにばかり注がれていたのは、どの見舞客にも増して肝腎の溝上の現われるのをひそかに待ち焦がれているためで、澄子は毎朝の目覚めに必ず、頭のなかで小さな象牙の賽を二つからからと振ってその目を占う事にしてあった。占いの意味には二た通りあって、溝上がこれっきり自分を捨てるかどうかと、捨てるにしても病院へ来るか来ないか、で、土佐には珍しく粉雪の舞ったその日も、澄子の望んでいる大吉のぴんぞろは出ず、一三とか三四とかのスカばかり、頭のなかで自分勝手に描く事とは云い乍ら、この年になつて男に捨てられ、一生をこの病院で飼ひ殺しの自分の行末を目に見るように思つて心沈んでいたところ、夜が更けて渡り廊下の方角からよく耳に馴染んでいる特徴のある小さな嚏が三つ、続けざまに聞えた。

病院は九時になると看護婦が来て窓に白木綿のカーテンを引き、室内の灯りを消して行くが、人目を憚る溝上は予め芳子からそう云う按配を聞いておいてからこの時間にやつて来たものであらう。

足音を忍ばせた溝上が枕許のスタンドの灯りの輪のなかに入つて来るなり、澄子は持前の早口で、

「何故早うに来てくれなんだ？ 暮からこつちずっと背中見せつ放しやないの。ええひとでも出

来たのと違う？」

と詰ると、付添婦の前では泳いでいる涙がたちまち盛上り、それを見た溝上はさも可笑しそうに、「何やお前、人並みに愀氣云うのか。裏返しうらがしの亀になったくせに、」

と云われた途端、澄子もふっと誘い込まれ、入院以来殆どひと月振りひとつきぶりで初めて齒を見せて小さく笑った。

「それでもねえ、おっさん」

となつかしく呼んで甘え、

「亀の裏返しはまだ手も足もバタバタさせられるけどねえ、うちはこらこの通り、」

と視線だけ廻して蒲団の上に揃えて投げ出してある手を指し、

「お茶飲むのも髪梳くのも着物着るのも皆人の手や。その人の手も思うように動いてくれん。機嫌きげんの悪い日は半日も放って置かれるし、」

と涙の玉を耳の穴に垂らし乍ら、子供が云い上げするときのように下唇を突出して訴えると、面倒な話の嫌いな溝上は手を振って、

「お前に泣き顔は似合わんと前から云うてある。目を明けたままで泣かれると、こっちは狐にでも化かされちゃうような妙な気分になるが。なに、貸さえ弾めば付添婦もええのが来てくれるよ。今月からその分入れて、十五万、」

と封筒を枕の下に敷いて立上り、冷たくなった澄子の手を蒲団の中へ入れてから、

「金の事は心配せんとゆっくり養生しいや。癒るまで儂が見るきに、」

と帰ろうとする背中へ澄子は霑^{うる}んだ声で、

「有難う済まんねえ、おっさん」

と札を云い、つぎ足して、

「うちが三十七の年からもう十六年の古女房やもんねえ。怪我くらいで切れるおっさんやないとうち信じちよったよ」

と嬉しさの余り全部云つて了うと、溝上は振返つてこらつ、と澄子のおでこを軽く叩き、

「病人のくせに口の立つやつ。病人らしゅうちつとは殊勝に黙ちよったらどうや。ほんなら、また来る、」

と、湿った様子もないいつもの調子、いつもの口調で暗い扉の外へ消えて行つた。

澄子はそのあと暫くはたとえようもなく心がうきうきし、これを云うと必ず溝上が相好を崩して喜ぶ、

「おっさん、まあ顔の光沢^{つや}のええ事、二十代の若い衆みたいや」

と、もうひとつ、

「おっさんの白髪^{はく}の少い事。却つて日に日に黒うなつて行くみたいや」

との言葉を云い忘れたのを思い出し、今度来たら念入りに普段の何倍も云つて喜ばせてあげようと思つたりしている。

澄子がひたすら溝上を待っていた心の内をめぐれば、逢いたい頼りたい気持の他に、やはり一番気掛かりな金の問題があった。